

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

広島女学院大学 学長 ^{みなと} 湊 ^{あき} 晶 ^こ 子 氏

1932年仙台に生まれ神戸で育つ。戦時下に疎開先の千葉で空襲に遭い、校庭内の防空壕が崩れ多くの友を失うとともに、自らも死の淵に立つ。戦後、神戸に戻り高校を卒業、親元を離れて東京女子大学に進学する。1956年にフルブライト奨学生として渡米し、ホイートン大学大学院にて神学修士を取得、ハーバード大学の客員研究員として初期キリスト教史を研究した。

その間、同じフルブライト奨学生であった男性と結婚して帰国、二男一女に恵まれるも事故で夫を失い、一人働きながら子どもたちを育てた。東京基督教大学、東京女子大学で教鞭を執り、NHK 英語会話中級の講師も務めている。2002年から2期8年間東京女子大学学長として日本の女子高等教育を牽引した。研究者としても多くの成果を上げており、キリスト教史に加え、女子教育に関わる論考を世に問うとともに、東京女子大学設立者である新渡戸稲造の教育思想も究明した。学長任期を終えて女子教育の一線から身を引くが、男性キリスト者によって創設された点で母校と設立経緯を同じくする広島女学院大学に請われたことから、広島的女子教育のために単身広島に移り2014年より同院長・学長に就任している。

日本私立大学連盟理事、大学基準協会監事など高等教育界に貢献する他、ワールド・ビジョン・ジャパン理事・国際理事として途上国の教育振興にも長年尽力する。2008年ホイートン大学より「名誉卒業生功労賞・名誉博士号」を授与され、2005年「第2回新渡戸・南原賞」を、2010年「瑞宝中綬章」を受賞した。著書には『新渡戸稲造と妻メリー』（キリスト新聞社）、『国際社会で活躍した日本人』共著（弘文堂）、『女性を生きる』（角川書店）などがある。

このように湊氏は研究者としてまた教育者として社会に多大なる貢献をされてきた。ただ、まずもって氏ご自身が、戦中戦後の日本を、信仰をもって生き抜いた一人の女性であった。戦中においてキリスト者であった祖母と父に生きることの大切さを教わり、いくつもの挫折を経験しながらも女性が教育を受けることの意味を理解することができた。戦中の怪

我が治療のため子を持つことが難しいと聞かされて結婚を諦め、研究者として生きることを選んでフルブライト奨学生として渡米する。最高水準の教育を受け、将来を約束されて初期キリスト教史の研究者の道を進むなか、渡米船で出会った同じ信仰をもつ男性との交際が始まり、長く迷いながらもお互いの深い理解に達して結婚を決意する。男児にも恵まれ、帰国後は育児を優先してフルタイムの仕事には就かず、女性として、妻、母、研究者の共存を目指した。二男一女が与えられるも夫を事故で失い、未亡人として幼い家族を守り続けた。働く女性を支援する保育施設も限られ、育児休業も認められていない時代である。家事と育児を切り盛りしながら、氏は大学で教鞭を執りつつ女性史研究者としてもまた女子教育の実践家としても研究と教育を先導されたのである。

湊氏の唱える女子教育はキリスト教を基盤としたリベラル・アーツ教育である。氏の主張が現代日本において自立した女性を育てる教育として矛盾なく説得力をもっているのは、それが氏の経験に裏打ちされているからだと言えよう。確かに、氏が女子教育として語ることのひとつひとつは具体的である。ご自身が自立した女性の先駆者として歩んで来られたのであり、女性が留学し最先端の研究者となることも、女性が働きながら子どもを育てることも、極めて希であった。だからこそ、単なる理想論でも空理空論でもなく、戦後日本の社会のなかで女性がどのように生きていくことが自立した人格をもつものであるのかを、夫との関係、子どもとの関係、仕事と家事と育児に関わるときの心構えなどのうちに示すことができているのである。氏の女子教育は、東京基督教大学及び東京女子大学における教育実践として身を結び、さらに、東京女子大学学長及び広島女学院大学学長としてのリーダーシップのもと、多くの女子学生の指針となった。そして、女性の生き方の支えとなるとともに、日本の社会を変えるきっかけとなりつつある。

18世紀スイスの思想家であり実践家であったペスタロッチーは、それまで教育の対象とは考えられてこなかった貧児を集めて教育の機会を与え、どのような状況にいる子どもも知的にも道徳的にも学びうることを証明した。湊氏の女子教育実践もまた、戦後日本の社会のなかで人格的成長を阻まれていた女性に対し、自立の在り方を示すものである。氏の長年の努力と功績に対し、第25回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。